

生研 ニュース

PHOTO 倉科満寿夫

1995.6.1
No.34

IIS TODAY

●第3部
ゲルハルト フェーソル
助教授

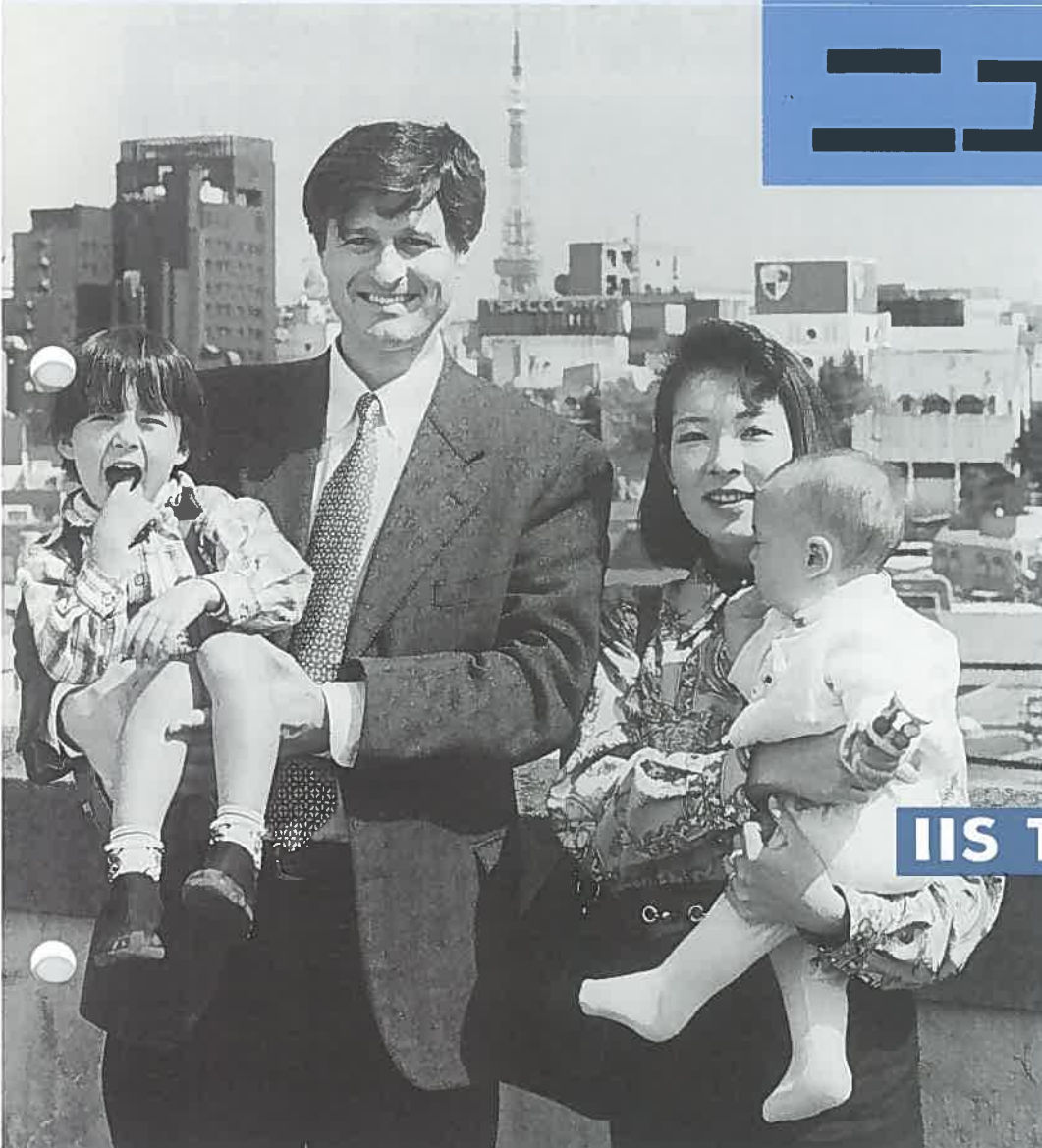
電子の波動性とスピン——半導体電子デバイスで未だ用いられていない電子の性質である。フェーソル先生は半導体微細構造中の電子の波動性と半導体/磁性体構造中の電子のスピンに注目、それらの物理を探究するとともに新しいデバイスの概念を模索されている。

先生の経歴は華麗で国際的だ。オーストリアのウィーンに生まれ、15歳の時に家族とともにドイツへ移住したのが国際的キャリアの始まり。その後英国ケンブリッジ大学で学位を取得し、ドイツのマックスプランク研究所を経て、ケンブリッジ大学講師や日立ケンブリッジ研究所長を歴任、3年半前に本学先端研の客員助教授に迎え

られた。一昨年より生研で助教授をつとめておられる。

ご家族もご覧の通り国際的である。日本人の奥さんと2人の男の子がいっしょ。お子さんには先生はドイツ語、奥さんは日本語で話しかける。一方、夫婦の会話は英語。何と3か国語が飛びかう。

仕事ぶりは日本人以上に精力的。深夜や休日でもオフィスには明かり灯っていることが多い。家族思いの先生は休暇のとり方がいい。しばしば家族で海外旅行をされるという。先生の趣味はスキー。ヨーロッパでは勿論アルプス、日本では富良野へよくいかれる。でも現在の最大の趣味は日本語を覚えることだそう。 (T.H)

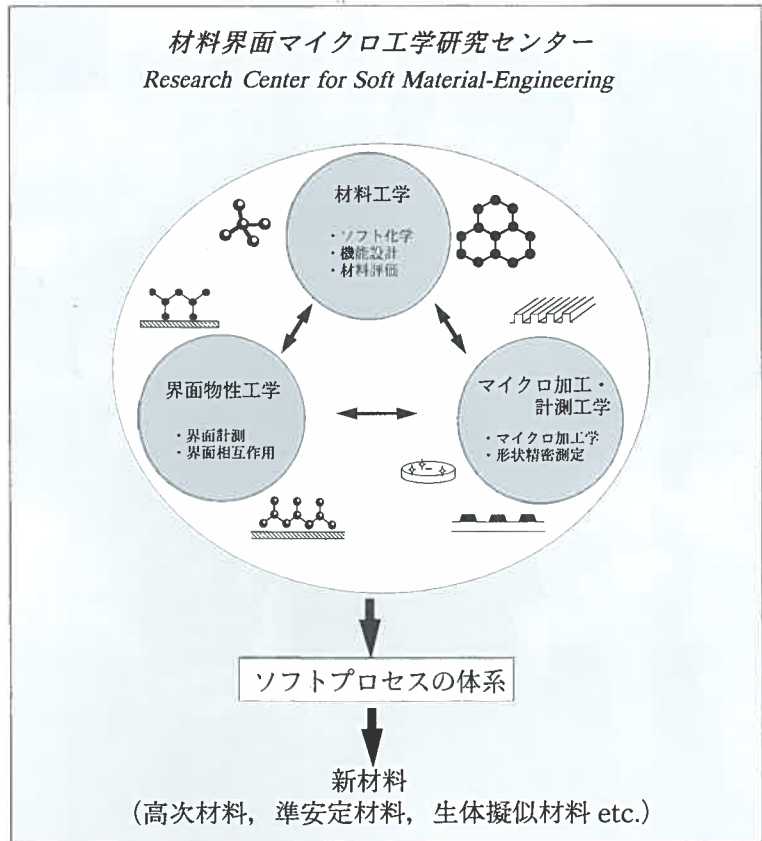


■材料界面マイクロ工学研究センター発足

平成7年4月、東京大学生産技術研究所に材料界面マイクロ工学研究センターが開設された。複合材料技術センター、先端素材開発研究センターに続く、本所における3代目の材料関連研究センターである。物質の界面等を利用する“ソフトな”材料創成プロセスおよびこれに関連するミクロな加工・計測技術について研究する。

先史時代から一貫する材料開発の潮流は、プロセスの高温化、高圧化、高エネルギー化の歴史と見ることができ、現在ではプラズマやビーム等の技術を用いる「極限プロセス」が追求されている。われわれが手にしている材料、素材の多くはそこから生み出されてきた。しかし、地球環境問題や資源問題という生産活動に対する制約条件を考慮すると、そのような強引ともいえるエネルギー多消費型のプロセス(=ハードプロセス)にのみ今後の材料の進歩を頼むのは到底不可能と言わざるを得ない状況にある。

本センターは、ハードプロセスとは機軸を異にする新たな材料創成プロセスの確立を目指している。それは、物質の表面や界面に作用する「自然力」を巧みに制御・活用して、レゴ細工でもするように、比較的穏和な条件下で原子や分子の秩序、組織を構築するというソフトなプロセスである。このソフトプロセスを工学として体系化し、21世紀の材料の進歩に寄与することがこのセンターの目的で



ある。そのため、材料工学、界面物性工学および微細精密加工工学の分野が、連携・共同して次のような研究を行う。

- ・高次マイクロ機能材料工学分野 (教授：工藤徹一、助教授：香川豊) ソフト化学的および複合材料学的手法により新規な高次マイクロ機能材料を創成し、構造と物性の相関を明らかにしつつ、その応用についても研究する。
- ・マイクロ加工・計測分野 (教授：増沢隆久) マイクロ加工による微細構造の生成と高次材料の

マイクロ加工、超精密加工により高機能な材料構造およびインターフェイスを実現するとともに、それらの最終的評価を可能にするマイクロ計測技術の研究開発を行う。

- ・界面表層マイクロ工学分野 (講師：酒井啓司) 物質の界面・表層における分子の振る舞いを測定する光散乱などの手法を開発し、これを用いて2次元特異構造の生成メカニズムとその機能について研究する。

(センター長 工藤徹一 記)

第8回学術講演会「阪神淡路大震災—復興と教訓」開催される

去る3月30日、本所第1、2会議室において、第8回学術講演会「阪神淡路大震災—復興と教訓」が開催された。今回の学術講演会は、原島前所長のたつての要請を受け、急遽開催したものである。会には、黒田和男教授（研究交流委員長）の司会、原島文雄教授（当時所長）の挨拶に始まり、本所第1部 岡田恒男、第5部 高梨晃一、片山恒雄教授が震災後多忙を極める中、一堂に会し、それぞれ約1時



間にわたる講演を行った。当日は冷たい雨にも拘わらず、産官学等の広い範囲から230名を越える参

加者が集まり、講師陣の講演に真剣に聞き入っていた。（K.K.）

KOBEnet 活動報告

阪神・淡路大震災の2週間後から開始したKOBEnetの活動も、今では大きな広がりを持つようになった。これまでの主な活動を以下に示す。

- ・神戸緊急連絡集会（1995年2月16日、東京：東大生産研）、第2回連絡集会（1995年3月31日、京都：京大会館）の開催。
- ・KOBEnet名古屋、KOBEnet中国などの支部の発足、および、全国的な連絡網の整備。
- ・学会的には、当初建築学会（構造系）と土木学会（構造系）の研究者を核としてスタート。現在で

は、建築学会（計画系）、都市計画学会、地域安全学会、地震学会、自然災害学会、GIS学会、写真測量学会、土質工学会などの情報交換も密に行っている。

- ・GIS学会と協力し、第5部柴崎助教授を中心として、ベクトル地図データ（1/2500）およびGISソフトの配布のために準備中。
- ・海外への情報提供：INCEDE Newsletter Special Issue（January1995）の配布とインターネットの開設。

INCEDE Newsletterは既に、120ヶ国以上の3,500以上の組

織と個人に配布済み。インターネットは常時アクセス可能（アドレス：<http://157.82.98.44/kobenet/KOBENetHome.html>）。

- ・海外調査団との直接ブリーフィング。延べ13ヶ国、約100名の調査団と対応。
- ・地震動記録の送付サービス（ただし、非営利目的の場合に限る）。
- ・KOBEnet 東京展示室（第5会議室：平日 月～金9:00～19:00、これまでの利用者数<受付記録による> 延べ260名）の設置。

（K.K.）

ブロイレル先生、スイス調査団の一員となる

1月17日の阪神大震災直後にスイスの地震工学連合（The Swiss Association for Earthquake Engineering and Dynamics）からKoller博士、

Studer博士、Wenk氏の3名より成る調査チームが神戸に派遣された。目的は建物、産業・交通施設、インフラなどの被害状況調査であり、このチームに助力を依頼

されたのが本所第2部助教授（当時）でスイスご出身のブロイレル先生であった。先生は原島所長（当時）、INCEDEの片山センター長らと相談の上、生研から発行され

たスイスチームの紹介状を手に関西に向かい、震災翌日の18日には神戸で彼らと合流した。市内のアパートを拠点として以後丸2日間スイスチームに同道し、通訳として活動しながら惨状を具に見て回られた。高速道路橋、港湾、化学タンクなどの災害状況に大きな衝撃を受けられたそうであるが、どこを訪れても生研からの紹介状が大いに役立ったとのこと。また、神戸大学の桜井、沖村両先生にも大変お世話になられたそうで、厚くお礼申し上げたいと語っておられた。(Y.T.)



第13回生研国際シンポジウム 「メソスコピック系の物理とエレクトロニクス」開催。



第13回生研国際シンポジウム「メソスコピック系の物理とエレクトロニクス」が、3月6日(月)から8日(水)に生研の第1、2会議室において、生研と科研費重点領域研究「量子位相エレクトロニクス」との共同主催により開催された(荒川泰彦教授と安藤恒也物性研教授が共同組織委員長)。この会議ではメソスコピック構造およびナノ構造における物理とそのエ

レクトロニクスへの応用についてレベルの高い発表、討論がなされた。発表の内訳は、招待講演16件、口頭発表42件、ポスター発表51件(計109件)であった。全参加者数は231名であり、うち外国人は46名であった。会議室には約240の椅子が用意されていたが、常に殆ど席が埋まった状態で活発に議論がなされていた。(T.H.)

生研での研究環境は…外国人研究者との懇談会開かれる!

毎年恒例となっている外国人研究者・留学生と関係教職員の懇談会が、3月14日(火)健保会館で開かれた。この会も年々盛会を重ね、今回は約150名の参加者を得た。留学生によるスピーチでは、出身国が中国、メキシコ、フランス、インドと文字通り国際色豊かとな

り、生研の優れた研究環境についてふれる方が多かったことが印象深かった。夫妻や子供同伴の留学生も目立ち、和やかな雰囲気懇親が深められた。最後に集合写真の撮影があり、お開きとなった。

(第4部 篠田純雄 記)



増子先生お疲れさまでした 退官記念講演会開催される

3月16日、第一会議室において増子昇教授の退官記念講演会が「製錬・腐食・表面処理—研究の流れと将来」と題して行われた(増子先生のご略歴はNo.32の表紙参

照)。先生の幅の広い研究の歩みが紹介された。そのあとの懇親会も。さまざまな方々とのつきあいを楽しんでこられた先生らしく、多くの方から楽しいスピーチがあり、



盛り上がった。(T.K.)

20年間ありがとうございました 永年勤続者表彰式



平成7年度の東京大学職員永年勤続者表彰式が4月12日に山上会館において行われた。本年度被表彰者113名を代表して志方富美子さん(病院)が吉川総長から表彰状を授与された。式に引き続いて祝賀会が催され、平野事務部長らと交えて、それぞれの20年を思い語りつつ、和やかなうちに散会した。

なお、本所の被表彰者は右記のとおり。

(人事掛長 小林健二 記)

第1部	用務員	石田幸美
第2部	文部教官・助手	杉山澄雄
第4部	文部教官・助手	虫明克彦
第4部	文部技官	藤井隆夫
電気計算機室	文部技官	平原清光
事務部	文部事務官・総務課企画主任 (併任 第3部業務掛長)	高橋義昭
事務部	文部事務官・総務課図書掛長	高杉泰穂
事務部	文部事務官・総務課司計掛長	大場琴也

Welcome to IIS 大学院生歓迎会

恒例の院生歓迎会が4月24日17:30より第1会議室で開かれた。当日は200人を越す学生諸君と教職員が参加し、用意したビール、軽食も短時間でなくなるほどの活況であった。まず鈴木新所長の歓迎スピーチ、第2部浦教授の音頭による乾杯で始まり、若手教官を代表して第4部光田助教授と第2部鎌田助手から生研で暮らすための心得



が講釈された。また新設されたAV装置によって生研の歴史・研究活動がビデオで紹介され、学生諸君は生研に対して新たな認識をもった様子であった。新入生3人からも元気のよい即興の挨拶(?)があり、また

外国人研究員のロザイバ・ゴンザレスさん(ベネズエラ)の英語スピーチも飛び出し、和やかな雰囲気での歓迎会となった。

(大学院学生世話人代表 第5部 橋秀樹 記)

VISITS

● 博士研究員 (1995. 4月現在)

氏名	国籍・現職	受入研究室
MOLAS Gilbert L.	フィリピン	第5部 山崎研

● 客員研究員 (1995. 4月現在)

氏名	国籍・現職	受入研究室
KIRCHNER Helmut O.K.	パリ大学南校教授	第1部 鈴木研
BENOUAR Djillali	アルジェリア大学土木工学科助教授	第5部 山崎研
BLEUER Hannes	ローランヌスイス国立工科大学教授	第2部 増沢研
陳 立東	中国西安電子科技大学助教授 米国 Texas A&M 数学科客員助教授	第3部 今井研

● 外国人研究者講演会

3月2日(休)

司会：高木(幹) 教授

Prof. William J. Emery

Department of Aerospace Engineering Science Colorado Center for Astrodynamic Research (CCAR) University of Colorado, U.S.A.
"AVHRR and Land/Ocean Applications"

3月2日(休)

司会：喜連川助教授

Prof. Maggie Eich

Southern Methodist University, U.S.A.
"Checkpointing in Memory Resident Databases"

3月13日(月)

司会：喜連川助教授

Prof. Gideon Frieder

The George Washington University, U.S.A.
"Protection of Software-Introduction and Summary"

PERSONNEL

■ 人事異動 (平成6年11月2日～平成7年4月3日)

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	前官職(所属)・現官職
6.12.28	武笠まゆみ	育児休業		文部事務官 (総務課図書掛)
6.12.29	村井 俊治	職務復帰	文部教官教授 (第5部)	
7.1.1	洪 起 復 職		文部教官助手 (第5部)	
//	仲川 裕子	採用	文部事務官 (総務課図書掛)	
//	金田 明幸	//	文部事務官 (総務課用度掛)	
7.2.28	神崎 富男	死亡		文部事務官 (附属千葉実験所守衛)
7.3.1	Morelos-Zaragoza, Robert Henry	採用	文部教官助手 (第3部)	
7.3.16	渡辺 道夫	昇任	文部事務官 (総務課課長補佐)	文部事務官(総務課専門職員(国際交流担当))
7.3.31	増子 昇	停年		文部教官教授(第4部)
//	栗原由紀子	//		文部教官助手(第3部)
//	金 文澤 定 年			文部技官(第1部)
//	白髭 岩男	//		文部技官(試作工場)

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	前官職(所属)・現官職
//	瀬尾 眞治	//		文部技官(試作工場)
//	岡宮 誠一	//		文部技官(映像技術室)
//	葛西 良三	//		文部事務官(総務課長)
//	吉澤 達雄	//		文部技官(総務課施設主任) (併任 同 施設掛長)
//	Pramanik, Mohammad Abul Hossain	任期満了		客員教授(附属国際災害軽減工学研究センター)
//	Bleuler, Johannes	辞職		文部教官助教授(第2部)
//	藤井 輝夫	//		文部教官助教授(第2部)
//	Herath, Anura Srikantha	//		文部教官助教授(附属国際災害軽減工学研究センター)
//	大久保英敏	//		文部教官講師(第2部)
//	持田 灯	//		文部教官講師(第5部)
//	太田 丈児	//		文部教官助手(第1部)
//	洪 起	//		文部教官助手(第5部)

PERSONNEL

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	前官職(所属)・現官職
〃	木幡 行宏	〃		文部教官助手(第5部)
〃	箕輪 陽一	〃		文部技官(第3部)
〃	原島 文雄	所長併任 任期満了		生産技術研究所長
〃	中川 威雄	併任任期 満了		附属先端素材開発研究 センター長
7.4.1	鈴木 基之	所長併任		生産技術研究所長
〃	虫明 功臣	併任		附属千葉実験所長 (再任)
〃	村井 俊治	派遣	アジア工科大学院 (バンコク)	文部教官教授(第5部)
〃	中川 威雄	配置換	文部教官教授 (第2部)	文部教官教授(附属先端 素材開発研究センター)
〃	安井 至	〃	文部教官教授 (第4部)	文部教官教授(附属先端 素材開発研究センター)
〃	工藤 徹一	〃	文部教官教授(附属 材料界面マイクロ 工学研究センター)	文部教官教授(第4部)
〃	工藤 徹一	併任	附属材料界面マイ クロ工学研究セン ター長	
〃	増沢 隆久	配置換	文部教官教授(附属 材料界面マイクロ 工学研究センター)	文部教官教授(第2部)
〃	西尾 茂文	昇任	文部教官教授 (第2部)	文部教官助教授 (第2部)
〃	谷 泰弘	配置換	文部教官助教授(第 2部)	文部教官助教授(附属先 端素材開発研究セン ター)
〃	香川 豊	〃	文部教官助教授(附 属材料界面マイク ロ工学研究センター)	文部教官助教授(附属先 端素材開発研究セン ター)
〃	志村 努	昇任	文部教官助教授 (第1部)	文部教官講師(第1部)
〃	川口 健一	〃	文部教官助教授 (第5部)	文部教官講師(第5部)
〃	目黒 公郎	〃	文部教官助教授(附 属国際災害軽減工 学研究センター)	文部教官助手(附属国際 災害軽減工学研究セン ター)
〃	磯部大吾郎	〃	文部教官講師(筑波 大学構造工学系)	文部教官助手(第2部)
〃	福谷 克之	〃	文部教官講師 (第1部)	文部教官助手 (物性研究所)
〃	酒井 啓司	〃	文部教官講師(附属 材料界面マイクロ 工学研究センター)	文部教官助手(第1部)
〃	小高 猛司	転任	文部教官助手 (第5部)	文部教官助手 (名古屋大学工学部)
〃	鈴木 敬子	昇任	文部教官助手 (第1部)	文部技官(第1部)
〃	佐藤 剛司	〃	文部教官助手 (第5部)	文部技官(第5部)
〃	嶋脇 興助	〃	文部教官助手 (第5部)	文部技官(第5部)
〃	影澤 政隆	配置換	文部教官助手 (第3部)	文部技官(第3部)
〃	Herath, Anura Srikantha	採用	客員教授(附属国際 災害軽減工学研究 センター)	
〃	横井 喜充	〃	文部教官助手 (第1部)	
〃	中代 重幸	〃	文部教官助手 (第2部)	
〃	渡辺 道夫	昇任	文部事務官(山口大 学庶務部国際主幹)	文部事務官 (総務課課長補佐)
〃	小川 誠	配置換	文部事務官(学生課 課長補佐(学生担 当))	文部事務官 (総務課課長補佐)
〃	伊藤 誠一	〃	文部事務官(工学部 総務課課長補佐)	文部事務官 (総務課課長補佐)
〃	保戸塚吉明	〃	文部事務官(気候シ ステム研究セン ター事務主任)	文部事務官(総務課企画主任) (併任 同 第三部業務掛)

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	前官職(所属)・現官職
〃	鈴木 和美	〃	文部事務官(海洋研 究所総務課庶務掛 長)	文部事務官 (総務課出版掛長)
〃	根木 豊作	〃	文部事務官(工学部 総務課課長掛)	文部事務官 (総務課司計掛長)
〃	国分 和雄	〃	文部事務官(農学部 附属家畜病院事務 主任)	文部事務官 (総務課用度掛長)
〃	田中 裕子	昇任	文部事務官(学術情 報センター管理部総 務課研究協力係長)	文部事務官 (総務課庶務掛主任)
〃	菊地みつ子	配置換	文部事務官(庶務部 庶務課広報室主任)	文部事務官 (総務課出納掛主任)
〃	菊地 仁一	〃	文部事務官(庶務部 人事課服務担当)	文部事務官 (総務課人事掛)
〃	守山 幸宏	〃	文部事務官(教養学 部・数理科学研究科 総務課課用度掛)	文部事務官 (総務課用度掛)
〃	森 暉志	配置換	文部事務官 (総務課長)	文部事務官(帯広道産大 学入学主幹)
〃	坂本 昇	〃	文部事務官 (総務課課長補佐)	文部事務官(医学研究 所管理課課長補佐)
〃	菅谷 正昭	〃	文部事務官 (総務課課長補佐)	文部事務官(学術情報セ ンター管理課共同利 用課課長補佐)
〃	高橋 義昭	転任	文部事務官(総務課 企画主任)(併任 同 第三部業務掛長)	文部事務官(宇宙科学研 究所管理部庶務課専門員)(併 任 同 企画・広報係長)
〃	穂阪 尊行	配置換	文部技官(総務課施 設主任)(併任 同 施設掛長)	文部技官(医学部附属病 院分院施設掛長)
〃	大場 康生	〃	文部事務官 (総務課厚生掛長)	文部事務官(総務課第五 部業務掛長)
〃	竹内 隆志	採用	文部事務官(総務課 情報普及掛長)	放送大学学園総務部会 計課用度第二係長
〃	平井美智子	配置換	文部事務官(総務課 第五部業務掛長)	文部事務官 (総務課厚生掛長)
〃	大場 琴也	採用	文部事務官 (総務課司計掛長)	日本学術振興会事業部研究者養 成課研究者養成第二係長 (兼任 研究者養成第三係長)
〃	松永 茂	配置換	文部事務官 (総務課用度掛長)	文部事務官(工学部附属 原子力工学研究施設会 計掛長)
〃	小野 潤子	昇任	文部事務官 (総務課専門職員)	文部事務官(教養学部・ 数理科学研究科総務課 庶務掛主任)
〃	清水 要	配置換	文部事務官(総務課 第二部業務掛契約 主任)	文部事務官(総務課第三 部業務掛契約主任)
〃	井上 正典	〃	文部事務官(総務課 第三部業務掛契約 主任)	文部事務官(総務課第四 部業務掛庶務主任)
〃	後藤 和彦	昇任	文部事務官(総務課 人事掛主任)	文部事務官(総務課人事 掛)
〃	佐納 悠司	〃	文部事務官(総務課 司計掛主任)	文部事務官(総務課司計 掛)
〃	涌井 隆	転任	文部事務官 (総務課庶務掛)	文部事務官(東京外国語 大学アジア・アフリカ言 語文化研究所庶務掛)
〃	塚本 一文	配置換	文部事務官 (総務課人事掛)	文部事務官(医学部附属 病院総務課職員掛)
〃	磯山 勉	〃	文部事務官(総務課 第四部業務掛)	文部事務官(総務課第二 部業務掛)
〃	岡島 義則	〃	文部事務官 (総務課出納掛)	文部事務官(総務課第五 部業務掛)
〃	小村 昇	〃	文部事務官 (総務課用度掛)	文部事務官 (工学部材料学科)
〃	荒木 武昭	採用	文部技官(第1部)	
〃	松村 正康	〃	文部技官(第1部)	
〃	更屋 拓哉	〃	文部技官(第3部)	
〃	神子 公男	〃	文部技官(第4部)	
〃	霞岡 成	〃	文部技官 (試作工場)	
〃	中山 晋	〃	文部事務官(総務課 第五部業務掛)	

● 転任・退官・昇任・新任のご挨拶

国際災害軽減工学研究センター
第5部
客員教授
M.A.H. プラマニク
M.A.H. Pramanik



1992年1月より生研の INCEDEへ客員教授として招いて頂いてから、早くも3年が過ぎ、バングラディシュへ戻る時がきました。生研では INCEDEのセンター長である片山先生や多くの仲間に恵まれ、とても楽しく仕事をすることが出来ました。生研では、GISを用いた災害情報システムの開発、環境科学や宇宙科学のアジア地域への適用、天災や人災が人間生活に与える影響、等について研究を行いました。皆様の御多幸と実り多い研究生生活をお祈りして、お別れの言葉とさせていただきます。

第2部
助教授
ヨハネス ブロイレル
Johanes Bleuler



“Au Revoir 生研” フランス語で au revoir は再び会おうの意があります。実りの多かった協力関係が、これからも続くことを願いこの言葉を選びました。

お別れに、この生研の建物について感じていることを一言残したいと思います。外国の友人共々“メガシティ Tokyo”の活力、スピードには大変刺激されましたが、我々の次の世代には生研の今の建物はどうなるのでしょうか。木村“画伯”の絵に見られるよう、建築的価値の高いこの建物は。我がスイスでは、費用、使用上非効率であっても、このような建物はきれいにレストアされます。良質の物に対しては納得行く処置と思います。裕福な日本では可能と思いますが、いかがなものでしょうか。

皆様のおかげで楽しく充実した滞在でした。心より感謝いたします。

第2部
助教授
藤井輝夫



平成7年4月1日付けで理化学研究所化学工学研究室に転出致しました。生研には学生及び教官として合計7

年間お世話になり、研究者としての手ほどきに始まって今日にいたるまで、自由かつ真剣な雰囲気の中で育てていただいたことは、まことに幸運であったなあと改めて感じております。生研では、海中ロボットの研究を一貫して進めてまいりましたが、今後はこの研究テーマに加えて現在の研究室の名前にもありますように「化学」をメカトロニクスの中にどのように取り入れていくかという問題意識で研究のフィールドを広げてゆきたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。最後になりましたがお世話になった生研の皆様へ感謝致します。どうもありがとうございました。

第2部
講師
大久保英敏



3月31日をもって第2部講師を退官し、玉川大学機械工学科に転出することになりました。研究者として恵まれた環境の中で、13年間研究活動ができましたことを皆様に感謝いたします。生研では噴霧冷却技術、低温環境下における熱および物質移動現象の研究を行ってまいりました。この間、主に材料の熱処理等の物を対象とした研究から、人を対象とした研究へと研究の興味も移ってまいりました。今後は、研究者としてだけではなく教育者として若い人たちを育てていきたいと考えています。最後に生研の益々の発展をお祈りいたします。

第5部
講師
持田 灯



この4月より新潟県柏崎市に新設される新潟工科大学へ移ります。1981年4月に修士課程入学以来、助手・講師の時期まで14年の長きに渡り、生研の皆様には大変お世話になりました。元来、向上心に欠け性急にして妥協的な私がいろいろと仕事ができなかったのはひとえに、村上周三先生を始めとする生研の皆様のご指導、御鞭撻によるものです。新しい大学に移りましたら、少し基礎的な勉強をするともに生研の動向にも注目し、最新の情報にも遅れを取らない様に行きたいと思っております。

第2部
教授
西尾茂文



4月1日付けにて伝熱工学部門教授に昇任させていただきました。1977年に講師として着任以来、液相相変化現象の素過程と伝熱、振動励起熱輸送現象とその応用、伝熱促進技術、および熱制御システムなどを対象として研究を行ってまいりましたが、今後はエネルギー貯蔵など地球環境時代の要請に応える研究にも取り組みたいと考えております。工学が創成してきた人工環境が文化の一翼を担い、その人工環境と自然環境との融和が希求される時代をリードする総合工学研究所に相応しい研究を目指したいと思っておりますので、宜しくお願いいたします。

第5部
客員教授
A.S. ヘーラト
A.S. Herath



4月1日付けで国際災害軽減工学研究センターの客員教授に就任致しました。これからは INCEDE で水に係わる災害に関する研究と共に、講義や学生の指導に当たりたいと考えています。INCEDE で4年間の間に築いてきた基盤を元に、より収穫の多い研究活動を期待しています。INCEDE での研究活動に協力し激励して下さった方々に感謝すると共に今後もより一層のご指導、ご鞭撻を賜ります様お願い申し上げます。

第1部
助教授
志村 努



4月から助教授になりました。レーザーと光関係、特に非線形光学効果の一種であるフォトリフレクティブ効果を使った位相共役波の発生、光増幅、光学的画像処理などの研究をしています。今後は他の研究室との垣根が低いという生研の特色を活かして、自分の研究の領域を広げていきたいと思っております。ご相談に伺うこともあると思っておりますので、その節にはよろしくお願い申し上げます。

第5部
助教授
川口健一



4月1日付けで第5部の助教授に昇任致しました。専門分野は、軽量大空間構造に関する研究と開発です。生研に来てから10年が経ちましたが、これからも生研の恵まれた研究環境を活かして頑張っていきたいと思っております。宜しくお願いいたします。

国際災害軽減工学研究センター
助教授
目黒公郎



4月1日付けで国際災害軽減工学研究センター (INCEDE) の助教授に昇任させていただきました。専門は都市震災軽減工学です。地震による構造物崩壊過程のコンピュータシミュレーション、防災への VR の応用、防災都市システムなどの研究に取り組んでいます。また偶然だとは思いますが、1991年4月に INCEDE が発足して以来、それまで以上に頻発している感のある様々な災害の現地調査で国の内外を飛び回っています。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

第1部
講師
酒井啓司



4月1日付けで材料界面マイクロ工学研究センターの講師になりました。生研には大学院時代より今年で9年目、この間、音波や光をプローブにして主にやわらかいものの中身や表面の分子ダイナミクスの研究に携わってまいりました。ソフトマテリアルの分野は未知のことも多く、工夫とアイデア次第でどんどん新しい世界が広がってゆきます。これからはユニークかつオリジナルな測定手法で、新しい分野に挑戦してゆきたいと考えております。今後ともよろしく御指導、お願い申し上げます。

第1部
講師
福谷克之



この度4月1日より第1部でお世話になることになりました。専門は表面物理学で、これまで光励起過程やエピタキシャル成長などの研究を行ってきました。3月までは同じ敷地内の物性研で仕事をしておりましたが、心機一転また初心に戻って研究に取り組んでゆきたいと考えております。趣味はサッカーで、時々昼休みに生研の方々と一緒にプレーさせて頂いています。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

総務課長
森 暉志



4月1日付けて帯広畜産大学から転任しました。至らない点が沢山ありますがよろしくお願い致します。

仕事推進の信条は「仲良く、気持ち良く」です。

いきなりですが、好きなのは司馬遼太郎です。単細胞の私には読んでいて行間で空想にふけることができるので大変にお似合いです。ついでに Mozart も大好きです。ただし、ケッヘル番号が何番のなんとか変ロ長調のピアノコンチェルトのあそこが好きなどとはいけません。ただただ、多くの作曲家を聴いているうちに快く響いて「はまって」しまっただけのことです。そういえば、ボストン在住の私立探偵スペンサーとも懇意です。

訃報



千葉実験所事務官（守衛）神崎富男氏は、長らく御闘病のところ、去る2月28日逝去されました。享年58歳でした。同氏は、昭和49年本所に入所以来一貫して守衛の職務に精励されてきました。この間、先輩の守衛によく仕え、病の床に臥されるまでは、ほとんど休まず、仕事一筋で、文字通り「謹厳実直」な方でした。同氏はまた、柔和な人柄で、人望も厚く、本所にとって得難い存在でありました。これからも一層の活躍が期待される時期に職務半ばでこの世を去られたことは、誠に残念であります。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（千葉実験所事務主任 西村瑞夫 記）



第一部の岡野研究室で活躍していた寺田啓子さんが、4月15日の朝早く、亡くなりました。昨年6月に、胃の悪性腫瘍を発見してから、わずかに9カ月のことでした。あまりに早い旅立ちと思わずにはられません。

大学院修士課程修了後の21年間を生研で過ごし、固体表面と超高真空分野の女性研究者として、国内外に多くの知己を得るまでになっていました。研究に対しては本当に献身的な人でしたが、同時に、天真爛漫な明るさに加え、物事のけじめをきちんとさせようと言う正義感に溢れた人でもありました。前向きに人生に向かう姿勢は、病床にあっても最後まで変わりませんでした。

ご葬儀に際しては、所内外の多くの方々の弔問をいただきましたが、満開のしだれ桜の下で行われた納骨は、季節の花を愛でた故人にふさわしく、まことに印象的でした。人生の盛りで亡くなったことを心より悼むとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（第1部 岡野達雄 記）

AWARDS

叙勲

名誉教授	故北川 英夫	勲三等 旭日中綬章	1995. 2. 14
------	--------	-----------	-------------

受賞

第3部	教授	鈴木基之	学術賞	水処理における吸着現象に関する研究	1995. 3. 16
第3部	教授	今井秀樹	第10回電気通信普及財団賞	A Spread-Spectrum Multiaccess System with Cochannel Interference Cancellation for Multipath Fading Channels	1995. 3. 24
第1部	助教授	吉川暢宏	日本機械学会賞 研究奨励賞	ホモロガス変形を実現する構造決定方法に関する研究	1995. 4. 1
第2部	助教授 大学院学生	都井 裕 清末考範	日本機械学会賞・論文賞	マイクロクラッキング脆性固体の三次元メソ解析と損傷力学モデルの改良 (第1報、等方性損傷力学モデル)	1995. 4. 1

INFORMATION

■第三者評価実施せまる

国際諮問パネル (International Advisory Panel: IAP) による第三者評価は生研公開にあわせて、下の日程により行われる。

6月6日(火)

レセプション

6月7日(水)

生研全体・各部・センターの活動報告

6月8日(木)

グループ研究の活動報告
生研若手研究者との懇談会
生研所内見学 (生研公開)
IAP 会議

6月9日(金)

Press Conference

国際諮問パネルメンバー



Dr. Jean-Jacques Gagnepain
フランス科学研究所 (CNRS)
工学部門/部長



Prof. J. Eric McIntyre
リーズ大学繊維学部
/前学部長



Prof. Haresh C. Shah
スタンフォード大学
土木工学部



Prof. Chang-Lin Tien
カリフォルニア大学
バークレー校/学長



Prof. Jin Tongji
(金 同稜)
大連理工大学/前学長

■生産技術研究所一近日公開

来る6月8日(木)9日(金)の2日間は生産技術研究所公開です!。本号でも紹介したKOBEnetの活動や、LIMMS/CNRSとの共同研究等、時代を映す先端研究が多数公開されます。毎年好評の講演会の予定は右記の通りです。(N.Y.)

6月8日(木)

11:00~11:50 第1部 中桐 滋 教授 「構造の整形と形成」
13:00~13:50 第4部 安井 至 教授 「地球環境問題から見た製造業
—ライフサイクルアセスメントから人類生存問題へ」
14:10~15:00 第3部 橋本秀紀 助教授 「インテリジェントメカトロニクス」

6月8日(金)

11:00~11:50 第2部 大野進一 教授 「固体伝搬音と機器の加振力」
13:00~13:50 第5部 龍岡文夫 教授 「盛り土を鉄筋コンクリートなみに
強くできるか?」

■正門自動扉用カードの取扱いについて

5月1日より、正門の管理体制を確立するために、正門及び附帯する通用門の開閉を時間外「平日19:30~翌朝7:00(土・日・祝日は24時間)」に於いて自動扉にしカードでの出入りとなっています。

皆様には、すでに配付されているカードでご利用されているかと思いますが、次の事にご注意ください。

1. カードは教職員等に配付してあります(5月1日現在)が、6月1日以降は、各部等に備えてある発行申請書によって申請があった時に、交付することとします。
2. 生研より転出等する時は、各事務室等に備えてあるカード返却届に記入し、カードと共に返却下さい。
3. カードを紛失・破損した時はすみやかに、部に所属

する者は各業務掛、事務部に所属する者は庶務掛に備えてあるカード紛失・破損届に記入し、必要な手続きをお願いします。

4. すでに配付されているカードを、今後とも利用しない方は庶務掛に返却ください。
以上不明な点がありましたら、各事務室等におたずね下さい。



■生研セミナー開講

生産技術研究所の教官が、それぞれの研究分野に関わる最新情報を懇切丁寧に解説いたします。本年度前期のスケジュールは右記の通りです。講義概要、時間割、受講料、申し込み方法は、本研究所内生研セミナー係（Tel.Faxとも03-3402-1331）までお問い合わせ下さい。（研究交流委員長 黒田和男）

コース	テーマ	講師	期日
199	Sustainabilityとエコプロダクト 一次世紀の企業活動ガイドライン	教授 安井 至 教授 山本 良一 助教授 前田 正史 他 2名	7月3日(月) 4日(火)
200	画像処理による交通流計測—知的 交通システムの基盤技術	教授 高羽 禎雄 他 1名	7月13日(木) 14日(金)

■国際ベビーシッターの募集!?

赤ちゃんをあやすのは大変ですね。ましてや、それがアメリカ人の赤ちゃんなら、せっかく機嫌がよかったのがかえって泣き出してしまうかも知れません。誰か挑戦してみませんか? といっても本物の赤ちゃんではなく、コンピュータ上の赤ちゃんのことですが。

第3部、原島、橋本、瀬崎の3研究室では本学内外の諸機関の協力の下に、Networked Neuro Babyと題した実験システムを、来る8月6—11日ロスアンゼルスで行われるSiggraph'95に出展予定です。このシステムでは、本所の会場とロス会場のコンピュータ上に、各々赤ちゃんを住まわせます。この赤ちゃんには、耳と目そして手が備わっており、声で呼びかけたり、手を握ったりすることによって、様々な反応をします。また、この反応が高速ネットワークによって相手側会場の赤ちゃんに連なっています。日本側の赤ちゃんは、日本人として、またロス会場用の赤ちゃんはアメリカ人として育てまし

たので日本人の赤ちゃんを、ニコニコさせることが出来てもロスの赤ちゃんは泣き出してしまうかもしれないという訳です。本システムは技術的には、CG、高速ネットワーク、テレオペレーション、インタラクティブマルチメディア、ニューラルネットワーク等様々な技術を融合させたものであり、これらの分野の最新成果の検証実験の場でもあります。

日米間に時差があるため、リアルタイムでの実験は日本時間の深夜一朝にかけてということになりますが、ご興味のある方はどなたでも、是非御参加下さい。双方向実験中以外でも、オフラインによる展示を企画しております。また、本所の会場は、第3部講義室の予定です。詳細は第3部橋本研究室 (hashimoto@iis.u-tokyo.ac.jp:内線2360)、瀬崎研究室 (sezaki@iis.u-tokyo.ac.jp:内線2391) まで。 (第3部 瀬崎 薫)

■掛名変更のお知らせ

4月1日をもちまして、事務部総務課の出版掛が情報普及掛に名称変更いたしました。これを機会に情報普及掛の業務内容をお知らせ致しますと、「生産研究」「生研リーフレット・ソフトウェアベース」をはじめ、本所における研究成果や活動状況に関する刊行物の編集等の業務を行っております。このような業務内容を担当する掛は、他の国立大学でおかれていることはめずらしく、その意味では参考とすべき事例が少なく、新たな仕事の局面との出会いが多いので、その内容はコツコツとものを作り上げてゆく作業の積み重ねのように思われます。地味ではありますが、クリエイティブな気持ちを忘れず頑張っております。

なお、毎月発行しております「生産研究」を充実した



刊行物にするためにも、活発なる投稿を掛一同、カレンダーを眺めつつお待ちしております。

→(原稿締切日) 仮題締切日: 発行月4ヶ月前の10日
原稿締切日: // 3ヶ月前の10日
ご協力の程、よろしくご願ひ致します。 (T.T.)

夜明けはコーランの響きとともに

第5部事務官 森 瑩子

第1部事務官 永田 順子

1995年11月7日から17日まで、生研奨励会の「事務系職員等海外派遣助成」でインドネシアに出張しました。目的は東大研修「研究協力・国際学术交流事務担当者実務研修」で得た実践体験としての国際協力活動の視察です。訪問先は、第3部石井研の共同研究実験現場と大学、JICAのHEDS（高等教育開発援助）プロジェクトの支援大学です。石井研の実験現場では炎天下、停電回復を待ちながらの機器点検で大変な苦勞をされていました。バンドン工科大学では休暇や物品購入などの書式をいくつかいただき、勤務5年で3カ月の休暇を取得できることに驚きました。また、HEDSでは長期派遣専門家の本間教授にプロジェクトの事務所、スマトラの支援大学を見学させていただき、北スマトラ大学では学長室で茶菓子の接待、記帳の待遇を受け恐縮しましたがプロジェクトの人達が職を賭して海外で活躍し続ける姿に感銘を受けました。インドネシアは領域・自然・人口に恵まれ、子どもたちは暑いなか朝から晩まで水汲み・もの売り



よく働き、そして生き活きしています。国際共同研究やJICAの活躍などの“有無相補う”国際交流が結局は全世界から武器を“不用物品”にする早道になります。

数々の貴重な体験は研修を勤めてくださった先生方、お世話していただいた石井研、村井研、柴崎研、JICAの方達とともに忘れられません。本当にありがとうございました。

TIME TRAVEL

IIISタイムトラベル

第3回

試験溶鋳炉

(下)



前報の外観写真の中で行われていた実験操業である。現場の最も危険な溶けた鉄を出す穴を開ける作業は生研職員が製鉄会社の研究員だが、その他は全て実習学生である。全部で29回の操業で800人を越える全国の大学生、院生が実習活動した。溶けた鉄を扱う経験は何物にも代え難い貴重なものであった。日本の溶鋳炉技術者のほとんどがここを経験した。六本木移転の際に頑強に移転に抵抗したのがこのグループである。当時の総長とやり合ったことも言い伝えられているそう。

(第4部 前田正史)



ヨットとボート～技術で後押し

船体運動学 第2部 木下 研

この生研ニュースが皆様のお手元に届く頃は、アメリカ杯の勝者が決まっている事であろう。日本チャレンジの技術チームの一員として参加した筆者としては挑戦者シリーズの準決勝の最中の現在（3月27日）にアメリカ杯の日本艇の事は大変書きづらい。ヨット後進国の日本が2度目の挑戦をした訳であるが、乗り手の技術、艇の開発ノウハウ、実艇テストのノウハウ等々とニュージーランド、オーストラリア、アメリカのヨット先進国の実力に感心させられた。陸上のスタッフを含めて長期間をフルタイムで参加できる人の質と層の厚さに先進国と後進国との差が表れた様に思う。水槽試験、風洞試験、コンピューターを多用し、検力計を組み込んだ1/2スケールの艇による実験まで実施した日本の技術チームは多くの事を学んだ。たとえば波浪中の抵抗増加の重要性や、限られた日程の中で微小な性能差を水槽や風洞の様に一様でない実海面で最終評価を繰り返す効率的な方法である。これを書いている時点では結果は知らない訳であるが、我々の経験がまだ足りないとするれば挑戦者を続ける事しか、世界一速い艇になる道はない。やはり多大な設備と労力とそしてお金のかかるレースである。一つ感想を言わせてもらおうと乗り手の技術もさることながらシステム

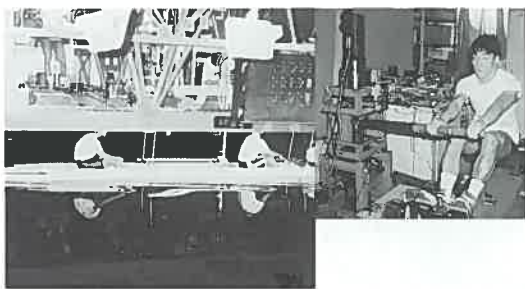
チックな実艇テスト法の向上が今後の課題としてあげられる。

ヨットの研究をしていて、学生時代ボート部にいた筆者はボート競技の艇の方も何とかしてみたいと考えるようになった。仲間を集め研究会を作り日本漕艇協会にも協力してもらい、アトランタ五輪（1996年7月）を目標に新艇の開発を始めた。アトランタ五輪から男子の舵無フォアと男女のダブルスカルに軽量級が加わる。体力的にハンデがあった日本としてはチャンス到来である。抵抗を測り成分分離した、摩擦抵抗、形状抵抗、造波抵抗、運動抵抗、空気抵抗と船型の関係を探った結果、例えばフォアの場合で、全抵抗22kgのうち形状抵抗を600g、運動形状を100g、空気抵抗を200g程度減らす事が出来る事がわかった。この艇でもってアトランタに日の丸を掲げてもらいたいと考えている。

もちろんボート競技は艇だけでは勝負に勝てない。漕手の能力の向上をはかる必要がある。その面で、筆者のボート部の先輩である尾台保生氏と今回開発した漕艇競技のための回転運動做い装置は従来には全くなかった新しいもので、オールの回転速度と負荷トルクを制御できる潛力計測、訓練用の装置である。五輪優勝タイムに相当する回転速度と負荷トルクで練習したり高速軽負荷でトレーニングしてみたり自由にトレーニングを計画して、潛力を向上させられる。

これらの研究がカップやメダルとなって結果が出来ることを切に望んでいるが、一方で研究すればする程、息の長い取り組みの必要性も痛感する。なお、蛇足ながら「遊び」の研究ばかりやっていると御懸念の向きには、超大型浮体構造物の早期実現のための研究もしておりますので御心配なく。

(第2部 木下 健)



●新任あいさつ

生研ニュースのスタイルは完成度が高く、これまでの編集に携わった方々の苦勞が感じられる。昨年4月編集メンバーとなり、生研ニュースの特徴の一つである表紙写真の撮影に何度か立ち合ったのは楽しい思い出である。本年4月より、生研ニュースの編集室長をお任せつかった。新しい企画も出していこうと、本年度のメンバーでああでもないこうでもない議論している。この生研ニュースが、生研内のさまざまな方々の間、さらには生研の方々と外部の方々の間に、より強い相互作用を引き起こし、それぞれの関係を深めるようなものになっていけばと考えている。ご支援よろしく願います。

新室長 第4部 加藤隆史

編集後記

新年度となり、新所長、新編集室長、etc.と新〇〇が目白押しである。その中でも注目すべきは新センターである（と個人的には思う）。3という数字は昔から時間の節目によく使われる。3代続けば老舗と認定され、3代江戸に住まなければ江戸っ子とは呼ばれない。3代將軍徳川家光が江戸幕府の礎を作り、悪い例では3代目が財産を食いつぶすことも多々ある。材料界面マイクロ工学研究センターはどのような3代目材料関連センターとなるか興味津々である。

(N.Y.)

